

---

したい

彰子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
したい

【コード】  
N90990

【作者名】  
彰子

【あらすじ】  
幸一は真綾タンの「したい」を手に入れた！

## 前篇

幸一はまず、自分の部屋を見回すことにした。窓、机、椅子、壁の時計、真綾タンの「したい」、本棚、遺書、愛読書、ゼミの資料、テキスト、夏物の服、パソコン。

パソコン、夏物の服、テキスト、ゼミの資料、愛読書、遺書、本棚、真綾タンの「したい」、壁の時計、椅子……。

「逃避とは防衛機制の一種である」

そう、そして逃避をしても問題の解決にはならない。担当教授の一般教養での授業の言葉を幸一は頭に浮かべた。

幸一は現実を直視した。

真綾というアイドルの「したい」。

「したい」。

「たしかに俺は『したい』を買いに行った」

そして今、自分の部屋には「したい」がある。何の問題が？

逃避。役に立たない防衛機制。やれやれ。

幸一が買い求めた「したい」とはここで横たわっているグラビアアイドルのファースト写真集のタイトルである。そして、この部屋にある「したい」とは死んだ人間の体のことでもある。「死体」と書く。「死体」は日本において茶毘に付されるのが一般的である。しかるべき手続きを踏んで、生前のゆかりある人々に見送られた後、高熱の炉でリン酸カルシウムにされるのである。最近では骨に高圧をかけて宝石に変える場合もあるが、たいていはしかるべき場所に埋葬される。死体に対するこの一連の儀式を葬式という。一部の学者によれば、葬式（特に埋葬）は、人が「悲しみ」という感情を生存競争とは関連しない形で表現した点で精神文化のはじまりとも考えられている。

逃避。以下同文。

幸一が心の中でこのように何度も逃走を試みる二時間ほど前、彼

はうきうきした足取りで大学から立ち去り、乗換駅の改札をくぐって、都心の大型書店へと向かっていった。

『べ、別に好きなアイドルの写真集が出るから浮足立ってるんじゃないからね。ほ、ほんとなんだから』

誰に聞かれるともなく、こんなツンデレ風の返答を心の中で用意している自分に気が付いたら、一度休暇をとることをおすすめするそれはさておき、幸一はさして有名でもないグラビアアイドルの大ファンとして、写真集のコーナーに直進した。

こ、こ。か、き、く、け、こ、小池、小泉、越川、後藤。大学三回生の今になって、グラビアアイドルの写真集を求めなんて馬鹿げている、と思いつながら、幸一は本棚の中から「小林真綾」の名前を探していた。コナコ（どういう由来の芸名なのだろう）、小早川、小宮山……？ 小宮山、小林……はなくて小早川。ない。

誰かが買っていったのか。まあ、無理はない。それほど有名でなくとも、ファンは一人だけではないのだ。幸一はあきらめて別の書店に向かった。

『べ、別に「したい」ってタイトルに性的な何かを期待しているわけじゃないんだからね。……怒るよ』

幸一は本格的に休暇を必要としていたらしい。

この書店でも「したい」、すなわち小林真綾の写真集を見つけたことは出来なかった。店員に尋ねようとしたが、女性店員しかいなかった。しかたなく、コナコに恨みはないが、彼女の写真集をワ行の最後に配置しなおして、一応の満足を得た。この店にもう用はない。

幸一は大学から都心を通って実家へ帰る電車のなかで、次のように考えた。

『今日はあきらめよう。初日に写真集を手に入れなくたっていいじゃないか。写真集についている応募券を使って、握手会と撮影会に参加できるチャンスなんか、あたるかどうか分からない時点でどう

でもいいじゃないか。いつも応援ありがとうございますなんてあの子が笑顔で言ってくれるかもしれないという夢と希望と男のロマンを明日に引き延ばしたところで、何も損なことはない。あなたの写真集は初日に買いましたなんて、別に嘘でも言えることだ。そうだ、別に今日じゃなくていいんだ。何を悩むことがある。小林真綾の「したい」は、いつだって俺を待っているんだ」

幸一がいつも降りる駅の一つ前で、ある人影が電車からホームへと降り立った。その駅前の商店街には一軒だけ、さびれた書店がある。改札を小走りでぐり抜けたその人影は、的確な歩行を繰り返して、書店の前までやってくると、ほこりっぽい感触のある玄関の扉に手をかけた。

「最初から本棚を探す気などないさ。店員に聞けばいい。俺は知っているんだ。この店をやっているのは物静かな爺さんだ。恐ろしく口の堅い、だけどひどくアブナイ方面の本も扱っていると噂の、なこの店の奥にならきつとあるはずだ、あの小林真綾が際どいポーズをいろいろとしているという写真集、「したい」が！」

勝利を確信した大学生の顔には、偏執狂の笑いが浮かんでいる。我らが主人公の頭はいまや第一次欲求のために煮え立ってしまったっているようだ。

「あの、「したい」、ください」

直球が年老いた店主に投げられた。しかしこの剛速球は、いささか舌足らずだったと幸一はすぐに判断した。驚いた顔の老人に向かって、幸一は教師のように適切な発音で説明を試みた。

「あの、小林真綾っていうグラビアアイドルの、「したい」が今日入荷していると思うんですけど、その「したい」の在庫がないかと思ひまして」

店主の顔は驚きを張り付けたままだった。

「あの」

店主が突然、ニカリと笑った。ニカリ。

「え……え？」

店主に腕を掴まれた。

「こつちにあるよ。来なさい」

写真集を持ってきてくれれば、それで大丈夫なんですけど。

「しかし驚いたな。うちは結構限られた得意先しかいないはずなんだけどね。私が材料採取するところを見たのかな。それとも誰かのところで、僕の作品を見たのかな。もしかして、そのときファンになった？」

理解できない事柄にぶつかったとき、自分の理解の範疇で話を合わせようとするのは、多くの人が犯す過ちであろう。

幸一の思考は次のような経過をたどることになった。

なんのことだ……ファン……とりあえず俺は真綾タンのファンだ。それだけは偽らざる真実。負けない。こんな爺さんが真綾タンの何を知っているというんだ？俺は真綾タンのすべてを見てきたんだ。ファンになった？違うね。ずっとファンだったんだ。誰よりも早い段階で。馬鹿なことを言うんじゃない。

「いいえ、ずっとファンでしたよ」と自信満々に幸一は答えた。

店主は幸一の顔をまじまじと見つめた後、また例のニカリを繰り返した。その顔のまま、幸一の腕をとつたまま、階段を下りていく。……また、笑った。何なんだ、この爺さん。なんで俺が店の奥に一緒に行かなくちゃいけないんだ。早く腕を放せよ。

「そうか、そうか。そういえば君、たしか中学生の時にちよつと大人の本を買いにきたよね。そのときは普通の子かな、と思つたんだけどね。それなのに、こちら側だったとはね。まあ、外見で分かるものでもないけど。……いやあ、こんなに若い人が同好の士だったとはね」

無口のイメージが強かったはずの老人が興奮した様子で自分に語りかけてくることに、幸一は漠然と不安を感じた。

これは何か、俺の期待した展開ではなくなっている。どちらかといえば、そう、何か打ち明け話をしているような。

ちがう、一蓮托生だ。

なぜこんな言葉が浮かぶのだろう。ああ、そうだ、二時間ドラマでよくある光景だ。純情で世渡りが下手な男が、悪い男に共犯を持ちかけられる。そのときの悪い男の話し方がちょうど、この老人のような話し方なんだ。で、そいつが言う、「俺たち、一蓮托生、だる。」

階段を下りた先に、少し広い部屋があった。本は一冊もない。かわりに、部屋の中には、確かに小林真綾の「したい」があった。

白い部屋。その片隅に黒い椅子。写真集ではない「したい」。それ以外は何もない。したい。死体だ。爺さんは俺が死体を買いに来たと思っている……？ 幸一は誤解を解こうと一瞬考えた。しかし、これまでの会話を思い出し、その誤解をほどくことが自身の死を招きうることを悟った。

真綾の体が横になっていた。足があった。死んでいるのか？ 腕があった。雑誌から出てきたような、おしゃれな服を着ている。顔があった。眼は閉じていたので眠っているように見える。死んでいるのか？ 外傷はなかった。生きているみたいだ。でもおそらく、死んでいる。死んでいるのか？ 小林真綾が？ 目の前で？ ウイトゲンシュタイン。

「今日入荷したヤツね。処理が終わったばかりで横にしてしまっているけど……それで合っているかね」

ウイトゲンシュタイン。語りえないモノに対して、私たちは沈黙しなければならぬとウイトゲンシュタインは言った。不可知。先輩の難しいテーマを聞いたとき、後輩のゼミ生たちが決まって発する言葉。ウイトゲンシュタイン。

「グラビアアイドル……確かに体は健康そうだったけど、私はよく知らない人だったね。そんなに有名なものかい」

「ウイト……それほど有名ではないけど、俺は好きです」

「材料を手に入れた後、適切に処理すればそれで作品になる。……作品と呼んでもいいよなあ。だってこんなに美しいのだから」

「確かに作品ですよ」

幸一は訳が分からないまま、正直な感想を述べていた。人間の体が最善の状態のまま留められている「したい」からは、原理は分からないが、確かに作品と呼ぶべき何かを感じる。

「そうだろう、そうだろう」  
「二カリ。」

## 中篇（前書き）

幸一は真綾タンのきわどい写真集「したい」を買いに来たはずだった…しかし本屋の老人が見せたのはしたい…死体…死体？ 本当に死んでいるのか？

## 中篇

「私はね、処理が楽しいんだよ。材料を手に入れることは好きでないし、実は君のように作品のファンでもないんだ。確かに一種の芸術ではある。人間という体から、命だけを抜き取ったようにすると、まるで切り絵のように、その体という枠が命をより明確にあらわすようだよ」

まったくもってワイトゲンシュタイン。

「だけどそれよりも、私は処理が楽しいんだ。死んでいる体をどれだけ生きているときの体の状態に近づけるか、その状態をどこまで継続させることができるか。いつも挑戦さ。材料入手から素早く処理に移らなければいけないのは当然なんだけど、それだけじゃないんだ。いろいろ試したけどね、最近やつと完璧に近い処理ができるようになった。……この作品は腐らないし、触感も生きているときと同じだよ。関節を曲げても大丈夫だし……で、他のやつも見るといい」

「いいえ」

「そう。けっこう良い作品もあるよ。本当に見ないのかい。……じゃあ、この作品でいいんだね？」

しばしの沈黙があった。

俺が小林真綾の「したい」を所有するということなのか。

「少し待ってくれれば、新しい材料が入るよ」

材料が入る。……つまり、殺される？ 誰かが？ 俺が？

幸一の視線は小林真綾の「したい」に向けられていた。

「これ、ください」

幸一は歯の根が合わない口でそう言った。

「君はこれで何をするの？」

「見ているだけです」

いや、何をするも何も、考えていない。ただ今は真綾の「したい」

を見ているという事実があるだけだ。俺は殺していない。俺は、生きている…：ような小林真綾の死…：体…：を、…：見て…：いるだけだ。幸一は自分の状況を確認する独り言が老人の質問に対する答えになりうることなど気づきもしなかった。

「変わっているね。…：でも、ありがたい。よいしょっと」

老人は小林真綾の「したい」を部屋の片隅にある椅子に腰かけさせた。老人は丈夫な体をしているようだった。

「他に買ってしまった人の中にはね、作品の体を無茶苦茶にする人が多い。というより、そんな人ばかりだ。だいたい私と同じくらいの年齢の金持ちが多いけどね。ただ作品を作る過程が好きというだけで材料を手に入れてくる私が言うことではないけれど、その材料の尊厳が考えられていないんだ。…：君、今どれくらいお金があるの？」

「変わっている？ お金。そうだ、写真集を買いに来たんだ。購入代金。お金は払わなければ。」

「三万円あります」

「ちょうどいい。それ、出してくれるかな。ああ、小銭はいいからね」

老人は懐から財布を取り出した。そして、幸一の手元にある三枚の紙幣のうちの二枚を抜き取り、財布の中に収めた。

「本当はこれの千倍からが相場だよ。でも、今日は特別サービスだ。君のような、若い『ファン』の人に会いたかったからね。…：私も若い頃からこうだったものでね。だから、今日のような日には、誰にも理解されない感覚から救われたようになる。気にすることはないよ。他の金持ちがしっかり弾んでくれるからね」

「ありがとうございます」

「運び屋を手配しとくからね」

「はい」

「運び屋？」

「じゃあ、店のほうで本でも買っていくかい」

「いいえ、帰ります」

そんな気分じゃない。俺は写真集を買いに来たんだ。

「そう。……あのさ、聞きたいんだけど」

「なんですか」

「君の『死体』の発音、変わっているね。……いや、別にどうってことはないけれどさ、『なにになにしたい』の『したい』に似ているなって思ったんだよね」

老人が誤解に気づき始めている。真綾の…ファンとしては、……どうせ殺されるのだから、訂正したほうがいいのだろうか。……それとも、やっぱりごまかして生き延びる可能性に賭けたほうがいいのか。ごまかすべきだろう。でもどんなふうに？

幸一は精神は逡巡していた。

「『したい』っていう写真集があるんですよ」

幸一の口は滑らかに動いた。この数分で芽生えた老人に対する服従の態度が生んだ結果だった。オウンゴール。後悔先に立たず。

「へええ、そうなんだ」

老人は普通の笑顔を見せた。意味が分からないようだった。あるいは、自分の声があまり聞こえていなかったと考えたようだった。

「悪いね、ひきとめて。作品は運び屋から受け取ってくれ」

この店から、出てもいいのか？

「はい……それでは」

「ああ、さよなら」

幸一は店の玄関から駅へ向かった。一駅くらいなら歩くべきなのかもしれない。わからない。ウイトゲンシユタインだらけだ。電車に乗った。人に会いたかった。通りすがりの物言わぬ人々に会って自分が日常の中にあるということを確認したかった。さっきのは夢だと確認できるような何かを求めていた。家に帰るまでの道で、そんなものがあるばいと思っただ。残念ながら、そんなものは一つも見つからなかった。

幸一は家のドアを開けた。床に倒れてみる。家に帰ってきた。帰

ってきたんだ。

固めのじゆうたんにつつ伏しながら、幸一は今日の出来事を振り返ってみた。

… 大学を出るまでは、いたって普通の日だったはずだ。講義、ゼミ、予習、友人の原田と軽食兼雑談、バスケサークルで軽くシュート練習。それで？ 大学を出てから、俺はいつたい何をしていたんだ？ ああ、そうだ。真綾タンの「したい」を買いに行った。一つ目の書店では見つからなかった。小林はなくて、小早川と小宮山しかなかった。二つ目の書店では、コナコをワ行の段に並べて悦に入った。三店目は、あの爺さんの店だ。そして、「したい」を見た。写真集ではない「したい」。二万円を払ってそれを買った……？ そんなばかな。

もつと冷静に考える必要がある、と幸一は自分に言い聞かせた。なぜ駅前の本屋に小林真綾の死体がなければならぬのか。なぜ小林真綾がさびれた本屋で死ななければならぬのか。なぜ真綾タンのあの店で死体となって俺に発見されなければならぬのか。… もつと冷静に考える必要がある。

あの店の爺さんは材料、という言葉を使っていた。材料は自分で採取するようなことも言っていたな。

『私はね、処理が楽しいんだよ』  
材料を処理して作品にする。作品。生きているような人間の死体のこと……。

で、材料は？ 生きている人間……？ 採取、生きている人間を採取する。…… 冷静に考えることが必要。

いや、俺は冷静だ。あの爺さんは人間を採取、つまり殺害して、その死体を加工して、まるで生きているかのようにするのが、

『楽しいんだよ』

冷静に考える。人間を採取する？ 違うだろう。何かゴムとか人工皮膚を、材料と呼んでいるんだろう。それで、人間そっくりな人形を作っているんだ。

いや、俺は冷静だ。あれが人形に見えたか？ あの爺さんは人殺しなんだよ。殺した人間の体に処理を施して、生前の姿に近づける。そして、それを作品と称して、二千万程度で変態に売りつける。そうやって生計を立てているんだよ。

冷静に考える。そんなことがありうるのか。殺人鬼があんなに呑気な様子で……。

チャイムの音。間延びしたチャイムの音。一度、二度。

ドアを開ける。陽気そうな男が立っている。

「こんにちは。注文の品をお届けにあがりました」

「どうも」

手押し車に乗せられた黒い箱。

一人が入るくらい、大きな黒い箱。

「ヤマグチコウイチさま、でよろしいですね」

幸一の疑念がまた一つ増えた。

どうして俺の名前と住所を知っているんだ？

「商品をご確認ください」

箱の上の部分が開く。小林真綾の顔。俺は冷静だ、と幸一は頭の中で唱える。

「よろしいですね」

「はい」

「作品を奥まで運びましょうか」

「お願いします」

たしかに黒い箱を運んできていても、この人間ならば不自然ではないと幸一は思った。それはきつと、仕事然としているからだろう。陽気な顔をしたこの男の運ぶものが、誰も「したい」だとは思わなはずだ。きつとどこかのイベントに使う機材を運んでいるのだと通り過ぎる人は思ったことだろう。それどころか、中身を見ても「したい」だとは思わないかもしれない。いや、おそらくイベントに使う人形か何かだと思っくに違いない。この男の顔は、おおよそ死と結びつかない。

幸一は「したい」を抱える彼の横顔を見つめた。「したい」を運ぶという仕事に、誇りを感じている。彼にうつつつけの仕事なのだ。「これで、失礼いたします」

幸一にサインをもらった男はにっこりと笑った。

「あの」

何を話すべきなのか。幸一と男の間の沈黙。またか、と幸一は思った。

「お困りですか」

男は笑顔のまま、尋ねてきた。

「あの店主も困ったものです。あなた、彼の勘違いに巻き込まれて、この作品を買うことになったのでしょうか」

「どうして分かるんですか」

「ただの勘ですよ。店主とは長いですからね。まあ、その勘違いであなたは助かったわけですが。彼の仕事を知っているのは、私たち運び屋と、お客と、材料だけですからね。なんの手違いか私には見当が付きませんが、とにかく欲しくもない死体をあなたは買ってしまった。顔にそう書いてありますよ。それで、この作品が届くまでは、夢か何かだと思いきもうとした。でも、これが現実です。あなたがこの作品の所有者です」

「どうすれば……」

「さあ？ 好きにすればいいでしょう。それとも私がしかるべき場所に運びましょうか。一分千円でやっています」

時給六万円。

「三日かかります。四百三十二万円。あなた、見かけによらず金持なのでしょう。二千万……この作品だと、五千万は下らないと思いますが」

そんな金、払えるわけがないという顔を自分はしていたのだろうと幸一は思った。いや、もともと金に縁のない顔なのだと思いなおした。

「では、失礼いたします」

男が扉の向こうに消えた。

## 後篇(前書き)

「したい」を運んできた男はぼったくり金額を吹きかけ、去って行った。

さて、これからどうすればいいのか……

## 後篇

幸一はまず、自分の部屋を見回すことにした。窓、机、椅子、壁の時計、真綾タンの「したい」、本棚、遺書、愛読書、ゼミの資料、テキスト、夏物の服、パソコン。三度目の確認。最終確認、という逃避。

幸一は現実を直視した。

小林真綾の「したい」。

「したい」。

幸一の眼は、次に時間を確認した。手を打たなければ。午後八時二十分。両親は九時ごろに帰ってくる。メールを打つ。

「遊びに行きます。車、使います。明日は土曜だから、結構遊んじやうかも。じゃあね」

手が震える。その手で車の鍵をとる。駐車場に向かう。早く真綾タンを運ばなければ。なぜ。捨てる。捨てるためだ。俺が真綾タンを捨てる？ ウイトゲンシユタイン。

幸一は「したい」を抱えた。リンゴ三個分。公式ブログの数字。驚くほど軽い。腕がつりそうなくらいの軽さだ。

ガレージを開ける。車のドアを開ける。幸一は何か開けてはいけないものを開けているような気分になった。

助手席に「したい」を乗せる。なんでここにいるんだよ、真綾タン。

警察に行くべきだと幸一はふと常識的なことを考えた。

で、警察に行つてどうするんだ、と思ひ直す。写真集を買おうとしたら死体を渡されました。これがその死体です。

……あの老人はどうして逮捕されないのだろう。客は、  
『だいたい私と同じくらいの年齢の金持ちが多いけどね』

二千万円が相場の「したい」を買おうと思う、変態の権力者。ドラマの設定なら、もみ消しくらい容易にできるだろう。……いや、

もみ消すことができるから、真綾タンがいなくなっても、それほど騒がないのか。

……俺がやったことになるのか？

幸一は警察の言いそうなことを想像してみた。

写真集を買おうとしたら死体を渡された？ お前、どうかしたのか。精神病を装うつつもりならやめておけよ。それとも本当に現実と虚構を区別できなくなったのか。

どうすればいいんだよ、真綾タン。幸一はこれまでの習慣に従って、心の真綾タンに尋ねてみた。そして、実際の真綾タンは死んでおり、まさにそれが悩みだったということに気がついた。

幸一は頭をかいた。そして、とりあえず全力で陽気にふるまうことに心を決めた。

よおおし、「したい」とレッツ・ドライブだ。

ドライブにはなんといつてもFMでしょ。幸一の手がカーナビを操作すると、陽気なアナウンスが流れ始めた。

「金曜の夜を華麗に演出する、ラジオ葉っぱがお送りしています」  
とりあえず、幸一は車を国道沿いに走らせてみた。車内は軽やかな洋楽が流れている。幸一の隣には、魂の抜けた小林真綾が目をつむったまま座っている。

一時間ほど夜のドライブを続けて、信号で止まった時だった。真綾の首に何かか掛っていることに幸一は気がついた。ネックレスではない。ネームタグのようなものだ。しかし、名前の代わりに、次の文字が打ち出されていた。

「作品の概略及び材料採取経緯」

コンビニに車を止める。ネームタグに入った小さな紙を抜き出す。広げてみると、細かな字がずっと印字されている。

製品の概略は、老人の言ったことを事細かに説明してあるだけであつた。

耐久期間：約二百年、関節可動、メンテナンス、特に必要なし、水洗可能（週に二〜三回行うことをお勧めします）。特に目的がなけ

れば、刃物などの傷がつかないように注意してください。

材料採取経緯：材料当人からの志願。

「志願？」

真綾タン自ら、ということなのか。そんな子ではないことぐらい、俺が一番知っている。

幸一は詳細の部分に目を通した。

どうやら昨日の午後、彼女は材料にされたようだった。

彼女が訪れたのは木曜日の午後九時。彼女が自分の写真集をベストポジションに置いてくれるよう、自主的に書店を回っている時間帯だったはず（ブログより）。その時間に、彼女はあの店で材料に……。……。？ 詳細の書かれた横の余白に、細かく走り書きされた文字があった。

「材料の意向：何度も死体のことを依頼」

おそらく、老人の文字だろう。どういう意味なのか。

……。死体……。したい。材料の言葉。幸一ははつとした。

どうやら彼女は俺と同じ過ちを犯したようだ。不用意にあの店主の前で「したい」と言っではいけなかったのだ。

「『したい』をよろしく願いますっ」

おそらく、こんなことを彼女は言ってしまったのだろう。彼女も少し舌足らずのところがあった。

幸一はさらに想像を膨らませた。

店主はいつもながら勘違いした。そして、彼女を店の奥に連れて行った。老人は自慢のコレクションを見せてニカリとする。どうだ。作品だろう？

そこで、こんなやりとりがあったのだろう。幸一は毎日のルーティーンである真綾タンの声の想起を始めた。

「で、どれにするんだい」

「ち、違っんです。そういうことではないんです」

「じゃあ、どういことなんだい」

「とにかく、『したい』をお願いします」

「お願いって……」

「お願いします。『したい』をお願いします。お願いします」

彼女は泣いていただろう。今日の俺がそうだったように、本来の目的以外を考えまいとして、必死だったろう。

「なるほどね」

と老人はひとりごち、その必死の訴えを自殺志願の少女の依頼と受け取った。

そして、彼女は材料になったわけだ。

彼女は店主の勘違いで殺された。

ばかっている。でも俺は冷静だ。

コンビニへ入った。

彼の求めていた小林真綾の「したい」が置いてあった。

「うん、普通の出来栄だね」

幸一は思わず感想を口にしながらレジに写真集を置いた。店員は不審そうな顔で幸一を見た。

『うん、この対応も普通。夜のコンビニで独り言をいう男には、こんな対応をしてしかるべきだ』

そして、助手席で眠る小林真綾が起きてくればいい。

あるいは、その姿が消え去っていてくれるほうが現実的だと幸一は思う。小林真綾が俺とドライブに行き、その間に疲れて眠ってしまつて、はつと起きあがって、

「ねえ、次はどこに行くの」

と俺に尋ねるなんていうことはありえない。ありえないんだ。

幸一はコンビニから車に帰るまでの間の距離にデジャビュを覚えた。あの店から家に帰るまでの間に思ったことと同じだ。今日のことは夢だと確認できるような何かを求めていた。車のドアを開くまでの間に、そんなものがあればいいと思った。でも分かっていたのだ。家からあの本屋までの距離と、コンビニの玄関からその駐車場に止めてある緑色の軽自動車の扉までの距離。どちらが短いのかなんて、分かり切っている。そんなものは見つかるはずがない。

F Mはいつの間にか洋楽番組から邦楽ロックの番組へと変わっていた。サンボマスターが流れている。

結構好きなんだよな、サンボマスター。ボーカルの名前が同じだから、どうしても気になっちゃうんだ。小林も結構ある名前だよな。そういうのってない？ あ、ないか。自分が芸能人だもんね。

幸一の頭に、エレキギターとドラムの音が響く。

「昨日のあーなーたがあーうそだといいうのならあー昨日のけーしきをおー捨てちまあうだけだ」

捨てちまあうだけだ。

俺が小林真綾を、どこかの山林に「捨てちまあうだけだ」。

「あたらしー日々をつなぐのは あたらしー君と僕なのさ」

小林真綾。山口幸一はあなたのファンでした。

でもあたらしー日々においては、あたらしーあなたは「したい」であり、あたらしー山口幸一はそれを捨てにドライブに出かける男です。

「ぼくらーなぜか 確かーめあう」

現実かどうかを？ こんなあたらしー関係を？

「世界じゃそれを愛と呼ぶんだぜえ」

……。

「心の声をつなぐのがあーこれほど怖いものだとかあー君とー僕が声をーあわすうー今まーでえの過去なんて なかつたかのように歌いだすんだあー」

短めの間奏。でもその間に、幸一は心の中の真綾に語りかけた。

なんで「したい」なんてタイトルを写真集につけちゃったわけ？ 事務所の意向？ 君はどう思ったの。どこかのエッチな大学生がタイトルに惹かれてほしい買い買っていくと思った？ そして喜ぶとそれが「したい」ことなわけ？ そうやって性の対象として見られることが君の本当に「したい」と思っていたことなわけ？ 違うよね。こんなところで終わっていいはずがない。しかも、ボケた殺人鬼の勘違いなんかで。

幸一はアクセルを少し強めに踏み込みながら、心の中で話しかけ続ける。

「僕らはいずれ誰かを 疑っちまうからあ せめて今だけ 美しい歌を歌うのさあ」

…前に真綾タン言ってたよね。ライフセーバーの映画の宣伝が流れたときに。

「あたしもいつかこんな映画に出たいです」

でもさ、それって嘘だよ。分かるんだよ。映画に出たいわけじゃないって俺には分かったんだ。その映画の宣伝でさ、主人公が高校生のときに海辺を走る姿がずっと使われていたよね。それ、したかったんじゃない？ そうだよ。映画女優とか、そういうのが夢なんじゃなくて。ブログでもずっと海のことばかり。君はさ、海辺を走りたかったんだよ。それを仕事にしたかったんだ。でも、なまじっか器量がよかったから、ライフセーバーとかプールの監視員とか、そういう仕事に就くための能力をこれまで習得してこなかった。でも、やっぱり海で走る仕事があったんだ。そのときはまだブログも見てなかったんだけど、分かったんだよ。それで、俺ファンになっちゃった。君が海辺で走っているところを見たら、さぞ気分がいいだろうなって思ったんだ。それだけのことが、って思うかもしれない。でも、俺にとってはそれが大切だったんだ。大学から先の未来を描けない大学生にとっては、それが大切だったんだよ。

「かなしいことーばではあ オイエイ 何も変わらないんだぜえ やつらが何をしたっていうんだあ」

君が何をしたっていうんだ。僕は何か間違ったことをしたかもしれない。でも、君は何をしたっていうんだ。あるいは、君の事務所の人たちが何をしたっていうんだ。君の両親が何をしたっていうんだ。君の友達が何をしたっていうんだ。何もしていない。プラスでもマイナスでもない、現実。そのまま終わっていいはずがない。

「昨日のあーなーたが 裏切りーの人ならあ 昨日のけーしきをお

忘れちまあうだけだ」

アクセルを踏む。軽自動車は窓に景色を映しては、忘れていく。ギターとドラムの音。浜辺に向かう。

午前零時。三時間も走り続けた幸一の顔には、疲労が浮かんでいった。もちろん、運転だけが疲労の原因ではない。

ブレーキ。パーキング。ドアを開ける。シートベルトをはずす。砂利を踏む。彼女の隣のドアを外からあける。

彼女の「したい」は眼をつむったまま、引きずり出された。幸一は砂の上に彼女を座らせ、自分もその横に座ってみた。

真綾の「したい」は、もしかしたら生きているんじゃないだろうか。横顔を見ながら、幸一はこれが一般人をひっかけるドッキリ番組の可能性に賭けてみる。

走ってみてよ、と幸一は心の中で話しかける。これがもしドッキリかなにかで、真綾タンが生きているなら、走ってみてよ。走れよ。走れったら。今まで走ってきただろう？ 今走らなくてどうするんだよ。走るんだよ。走れ。走れ。俺の存在なんか無視して、走れ。生命の法則なんか無視して走っちまえ。人間をまるで人形みたいにしてしまうあの爺さんがしたい放題して、それで真綾タンが死んでしまったら、爺さんが真綾タンに何かしたってことになるだろうが。あいつが何をしたっていうんだよ。何をしたっていうんだ！

「新しい日々を変えるのはあ いじらしい程の愛なのさあ 僕らそれを確かーめ合おう 世界じゃそれも愛と呼ぶんだぜえ」  
「もう、いいんだよ」

幸一の頭の中に、真綾タンの声が響いた。

幻聴だろうか。なんなんだろうか。ああ、俺はどうかしちまったんだろうか。何をしたっていうんだ！ 幸一は浜辺を走った。

意味がないんだぜ。俺が走っても意味ないんだぜ。俺が走っても、俺は君じゃないだろう。君が生きて走らなきゃ、意味がないんだぜ。何がいっていうんだよ。よくないだろ。全然よくない。走れよ。走れったら。小林真綾。本名はファンに明かしてないけど、とりあ

えず小林真綾。あんたが走るべきなんだ。走れ。意味ないんだぜ。走れよ。全然よくないよ。生きるべきだよ。君は生きるべきだったんだよ。

「あなたも走るべきなんじゃないの」

そうだよ。俺だって走るよ。でも、君が走るところを俺は見たかったんだよ。こんな夜じゃなくて、明るい日差しを浴びて全力で走る君が見たかった。俺だって走るさ。走ってやるよ。でもここにあるのはそんな問題じゃない。

「そんな問題じゃないの？」

俺は走ってるだろ。……走ってないように見えるかい？ 走っているとも。

「じゃあ、あれは……どうして書いたの」

……捨てる。捨ててやるさ。

「そう。なら安心ね」

安心さ。だから、走れよ。

幸一は泣いていた。泣きながら走っていた。

「悲しみで花が咲くものか」

彼女のソプラノが幸一の頭の中で響いた。

午前六時。幸一はガレージに車を納めた。家に帰ると、まず部屋を見回した。窓、机、椅子、壁の時計、さつき机に置いたばかりの写真集のほうの「したい」、本棚、遺書、愛読書、ゼミの資料、テキスト、夏物の服、パソコン。

逃避はしない。

遺書。気まぐれで書いた遺書。そのときは本気で書いたつもりだったが、あの程度の気持ちは、今なら気まぐれだと言える。先が見えないから、死のうとしただけの気まぐれ。

手に取る。破る。ゴミ箱に入れる。

窓を開けた。今朝の新聞を広げた。彼女のことは出ていない。失踪したことすら、掲載していない。幸一は捕まってもいいと考える。

「したい」を置いてきたことは罪に問われるだろう。でも、それくらいは受けて立つ。問題は、海岸にある人影が「したい」だと、海辺の住民が気づくのにとれだけかかるかということ。そして老人が罪に問われる日は来るのかということ。まだ、わからない。

朝日が差し込んできた。

「幸一、ごはんできたわよ」

はあーい。

頭の中でサンボマスターが叫ぶ。

「あーいとー　へーいわー」

真綾タン、俺、走るよ。君は走るべきだったけれど、そして君が走るべきであったことと俺がこれから走ることは何の関係もないけれど、走るから。

「世界はそれを愛と呼ぶんだぜ」

走り切るから。

f i n

## 後篇（後書き）

ここまで読んでくださった皆様、ありがとうございます  
また勢いで書いていたら終わってしまった……  
ご感想等を送っていただけたら幸いです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9099o/>

---

したい

2010年11月14日16時10分発行